詩集日本漢詩

第四巻

富士川英郎・松下　忠・佐野正巳編

汲古書院刊

詩集　日本漢詩　第四巻（第Ⅰ期第二回配本）
昭和六十年五月　発行
定価八、五〇〇円
富士川英郎
編者　松下　忠
佐野正巳
解題　松下　忠
発行者　坂本健彦
印刷　モリモト印刷株式会社
発行　汲古書院
102　東京都千代田区飯田橋二―五―四
電話（三五五）九七六四　振替東京五―一五八〇三五
©一九八五

解　題

南郭先生文集

松　下　　忠

なんくわくせんせいぶんしゅう　四編と補遺よりなる。一名「南郭稿」とも云い（藤原忠統の序）、「南郭集」とも云う（平野金華の序）。初編は十巻六冊、江戸の望三英君彦編輯、享保十二年丁未（一七二七）秋九月刊。二編は十巻六冊、東都の源君嶽編輯、元文二年丁巳（一七三七）秋九月刊。三編は十巻六冊、東都の熊元朗華玉編輯、延享二年乙丑（一七四五）冬霜月刊。四編は十巻六冊、男雄仲英編輯、宝暦八年戊寅（一七五八）夏六月刊。以上四編四十巻二十四冊。外に補遺がある。

詩篇の総数は四編合計一千四百四十首、補遺十一首、総計一千四百五十一首。文章の総数は四編合計三百四十七篇、補遺四篇、総計三百五十一篇である。

一　内容の構成とその特色

第一冊は巻之一で、鐃歌十八首と、五言古詩二十七首を収める。

第二冊は巻之二と巻之三で、巻之二には七言古詩十九首を、巻之三には五言律七十五首と五言排律五首と六言律一首を収める。

第三冊は巻之四と巻之五で、巻之四には七言律八十八首を、巻之五には五言絶句二十二首と七言絶句九十二首を収める。

第四冊は巻之六と巻之七で、巻之六には送序六篇、書序二篇、寿序一篇、計文章九篇を、巻之七には送序三篇、書序八篇、寿序一篇、贈序一篇、計文章十三篇、総計文章二十二篇を収める。

第五冊は巻之八で、記四篇、論二篇、擬書一篇、擬辞一篇、戯題一篇、銘三篇、墓碣四篇、祭文一篇、総計文章十七篇を収める。

第六冊は巻之九と巻之十で、巻之九には書牘二十通を、巻之十には書牘二十五通を収めている。書牘四十五通の内最も多いものは、徂徠先生に宛てたもので五通ある。他の四十通の書簡によって、南郭の交友の範囲と親疎の別を窺い知ることができる。

二　編纂の目的意図

享保十年乙巳（一七二五）に成る徂徠の「南郭初稿序」によると、南郭の門人が「南郭初藁」を梓行したいと願い出たとある。本多忠統撰の「南郭稿序」によると、門人が南郭の稿を梓行したいと願い出たところ許可しなかったので、本多侯は「子遷其れ之を急にせよ。（原漢文）」と勧告したとある。この徂徠の序の前年に成る望三英の「初稿跋」によると、南郭所有の文稿は火災に罹って全部焼失したこと、この書の資料は望三英が筆録して家に蔵したものであるという。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三　編著者

1　著者　服部南郭

南郭の伝記は、原念斎の先哲叢談巻之六、角田簡撰近世叢語巻之三文学の部「加茂真淵謂二服部南郭一曰、」の注文、事実文編三十四、南郭服夫子墓誌銘等がある。事実文編の墓誌銘は南郭先生文集補遺所収のものと相違する部分があるので、ここでは南郭先生文集補遺のものを書下して示すことにする。

於戲是歳は何歳ぞ。寶暦己卯の夏六月二十一日、故處士南郭服夫子卒す。壽七十七。門人、某月日を卜して、萬松山中の少林院に葬る。哀しい哉。其の嗣、雄と名づくる者、余に赴き、且之の誌銘を屬して曰く、先人公子の虚左之[注1]遇を蒙ること久し。今や木に就けり。先人常に孤に命じて曰く、吾人の後事を圖ること多し。筆硯に臨む毎に、伯喈[注2]之慚有り。一介の腐生、至微至賤、咎め無く譽れ無く、固より世棄の物爲るを分とす。吾沒するの日、爾愼んで伊の慚を貽すこと勿かれ。幸に集の遺る有り。千百歳にして知る者我を知らば、我に於て足る。然りと雖も、豈彼の睪如たる者をして何人なるかを知らざる所と爲さしむるは、孤の意に於て安んじて之に從はしめんや。狀せんと欲するの事は、先人の人と爲りは、凡百の行事は、未だ嘗て一言も、妻子家人に對して之を語らざるは、少自りして然り。往歳雄一女を擧げたり。先人曰く、我の生より先だつこと若干日なりと。家人始めて生日は九月念四なるを知れり。他は豈知りて狀するを得んや。唯其の先は尾州津島の七黨の一なり。曾祖父某越中の高島に徙る。父諱は元矩なる者、又京師に移れり。山本氏母爲り。天和癸亥之歳に生まる。生まれて十四、東都に來る。後三年柳澤侯に事へ、後十八年にして臣爲るを致して退く。雄の爲なり。母者之を云へり。孤不肖裁する所を知らず。伏して乞ふ、公子吾先人を遇すること終り有り。孤の爲にも之を圖れと。余慘然として之に對へて曰く、孝子雄、吾縣官に從ひ、肺腑の末まで、制の拘する所と爲り、笈を門下に負ふを得ず。幸にして時に眷顧之惠みを蒙り、惠擁摳趨し、韶音耳に在り。何れの

日か之を忘れん。今吾子の言を聞き、高風を追憶す。夫子は誠に其れ然るかな。夫子は經術に於ては述べて論ぜず。曰く、吾業を徠翁に受けたり。今日授くる所は、則ち昔日受けし所なり。遵奉して唯謹しむのみ。或人之を問ふに當世之事を以てすれば、則ち哂ひて曰く、縫掖之徒は事務を知らず、沾沾として人に對ひ、空談を以てして自ら喜ぶ。何ぞ蹇人の道を謀るに異ならんや。吾は敢てせずと。是所謂易を善くする者は、易を論ぜざる者か。盖し其の奥の蘊ふる所は、終世從遊する者と雖も、之を測ること能はざるなり。宜なり妻子家人の其の平日の狀に昧きこと。夫子の德業は得て稱ふ可からず。余の不佞なる、豈敢て一辭を置かんや。且夫子は他人の言を待ちて、以て後に顯るる者ならんや。物門之學は天下を風靡せり。夫子の與の大造有ること固より論無し。余を以て之を視るに、我が邦には斯文立言之業有りてより、能く其の左契を執り、經緯の横出すること、煥乎洋洋、體を具へて大なること、夫子より盛んなるは莫し。顧みるに隆世の氣運の釀す所天實に之を成し、以て大東に華ひらき、百世まで斯文に軌たらんか。率土之濱、南郭服夫子は何爲者ぞと問へば、五尺の童と雖も、答ふるに天下の文宗を以てす。口碑も焉に加ふる莫し。而して吾子の屬する所も亦以て已む可からざる者有り。姑く吾子と言ふ者を記し、之に係くるに銘を以てす、可ならんかと。雄唯唯たり。

夫子姓服部氏。諱は元喬、字は子遷、南郭は其の號なり。井出氏を娶り、三男五女を生む。今は唯三女のみ存す。其の著作する所皆世に行はる。雄字は仲英、弱冠にして夫子に師事せり。夫子晩にして其の季女を配せり。承くるの後能く家學を傳ふ。文采頗る夫子之風有るも亦余を歡ばすと云ふ。（從四位下侍從源頼順撰）

なお南郭の小伝と詩論については、拙著「江戸時代の詩風詩論（明治書院発行）」の四四一頁～四四八頁を参照されたい。

注1　虚左＝上席をあける。転じて賢者を礼遇する喩。

注2　伯喈（後漢蔡邕）。

2　初編の編輯者　望三英君彦

長澤孝三編、漢文学者総覧に依ると、「望月鹿門、名は乗、通称三英、字君彦、号鹿門。生地江戸、没年明和6、享年72。師名服部南郭。備考、幕府医官、望三英・望鹿門ト修ス。」とある。

その伝記は第三代大学頭林鳳谷（名は信言）が撰している。「望月君三英法眼碑銘」という。ここでは事実文編第二により銘を除いて書下して示す。

君は姓は望月、諱は乗、字は君彦、三英と稱し、鹿門と號す。家世〻醫を業とす。其の先忠菴、諱は宗慶、慶長十三年、外科を以て初めて神祖に駿府に見え、祿百五十石を賜はり、醫官と爲る。忠菴の子を浦菴元珍と曰ふ。君に於ては高祖たり。台廟の時祿二百石を賜はり、法橋に叙せらる。命有りて本方を兼ぬ。曾大父忠菴元庸、嚴廟の時父の祿を襲ぎ、外科直醫官に任ぜらる。大父甫菴宗諄は、寛文十一年外科直醫官に任ぜられ、元祿三年、命有りて業を本方に改めらる。其の後元春早く卒して子無く、同族の草菴の子を以てせり。君卽ち是なり。君は享保十一年を以て、直醫官に任ぜらる。十二年命を奉じて和劑局方を校（しら）べ、寫して之を上（たてまつ）り、賜を拜す。十五年、命を奉じて入内す。直ちに醫として入内し、方劑の事を預る。君は其の始と爲る。時人皆以て榮と爲す。十三年命を奉じて、普救類方後編を編修す。官庫の書を觀ることを賜はり、事を竣へて賜を拜す。十八年寄合（よりあい）と爲り、元文四年侍醫と爲り、法眼（げん）に叙せられ、職俸二百石を加賜せらる。德廟薨ぜし後復（また）寄合と爲る。寶曆四年西城の侍醫に擢でらる。十年今の大君殿下位に卽くや、原職を以て從ふ。

君人と爲り明敏にして謙讓、志を業とする所に致し、人と畛域すること無し。故を以て名譽藹欝、治を求むる者にて門常に市の如し。然れども未だ嘗て倦怠の色有るを見ず。暇には則ち讀書を以て事と爲し。著す所明醫小史・醫官玄稿・又玄餘草有り。皆醫門に益あり。又旁ら詞章に及ぶ。集には則ち焚餘小集有り。並びに世に行はる。男孔武は先に卒す。乃ち石井氏常觀字仲理を養ひ嗣と爲す。女二人、長は蜷川親篤に適き、男一人女二人を生む。而るに親篤

故有りて逃亡す。是に於て、其の子女を携へて家に歸る。君卽ち取りて養ひ子と爲す。長は田中敬忠に嫁ぎ、季は則ち常觀の妻と爲る。君の次女は曾谷俊貞に嫁す。

明和二年、君疾を以て職を辭し、六年十一月四日卒す。享年七十二、江戸淺草の壽松院に葬る。

3　二編の編輯者　源君嶽

長澤孝三編「漢文学者総覧」に依ると、「松下烏石、名辰・曇一、通称平吉、字は君嶽（岳）・龍仲・神力、号は烏石・東海陳人・金栗・青羅山人。生地江戸、歿年安永元、享年80。師名服部南郭・細井廣澤。本姓葛山氏、江戸ノ儒者―本願寺賓師。葛辰・葛烏石ト称ス、書。」とある。その伝記「烏石山人傳」（撰者不明、事実文編第五所収）を書下し文に改めて示す。

青蘿主人は、東都の藪竇に生る。菽竇處士と曰へり。古川に移居す。其處に烏石有り。因って烏石子と曰ひ、或は山人と稱し、或は道人と書せり。後に廬を赤羽に結ぶ。青蘿四壁に拍(はく)く。卽ち青蘿と曰ふ。因って自ら號して青蘿主人と曰ふ。後に亦東海陳人と稱す。少くして學ぶや乃ち酒徒に混りて縱飲し、詩を賦するに放蕩、稽阮之風有り。性書を好み、悉く古人の妙處を得たり。諸名山の書題は已に遍く、都下靡然として之に嚮ひ、日〻爭って來り會す。而るに之に處すること澹然たり。散髪にて睥睨し、旁に人無きが若し。興來れば則ち書し、絹幅相藉くこと、未だ嘗て旁午せずんばあらざるなり。王侯大人召見すれば拒まず。時有りてか至り、至りても亦屈せず。時有りてか書す。家には固より長物無く、唯其の嘗て愛玩せし所のもの七物有りしも、何(いかぼ)も亡(な)く人に與へて一物をも留めず。皆奇品なり。行事率(おおむ)ね此(かく)の如し。將に終に人間(じんかん)を謝し藥を名山に采らんとすと云ふ。姓は源氏、君岳は字を以て行はるるなり。右は友人の莊子謙（筆者注、莊田豐城）、余の爲に余の書を著(あきら)かにすること家姪と與にす。時に元文庚申の冬十二月なり。

4　三編の編輯者　熊元朗華玉

各種の伝記類を調査してみたが、記載されていないので、平凡社一九七九年刊の日本人名大事典（新撰大人名辞典）より引用する。

熊本元朗　徳川中期の儒者。江戸の人。通称自庵、元朗は名、字は君玉（三編は華玉になっている。華玉とすべきである。）華山と号し、熊本を自ら熊と修す。服部南郭の門に入り詩をよくす。また書を葛烏石に学んで殊に楷書に巧なり。著書『華山遺草』（岡本）。

5　四編の編輯者　男　雄仲英

長澤孝三編「漢文学者総覧」に依ると、「服部白賁、名は元雄、通称は多門、字は仲英、号は白賁、又蹈海。生地は摂津西宮、歿年は明和4、享年は55。師名は服部南郭。備考に本姓西村氏・中西氏、南郭養子、大坂ノ儒者、服仲英・服元雄ト修ス」とある。汲古書院発行、詞華集　日本漢詩　第五巻　熙朝詩薈(二)　巻第四十三所載　服元雄の条より引用し書下して示す。

父某は西宮の祝（はふり）たり。嘗て主祠の貪汚を訴へ、反って誣ひらるる所と爲り、竟に放逐せられて以て死す。仲英痛心刺骨、乃ち江戸に至り三たび之を官に鳴らし、事始めて白（あきら）かにするを得たり。學を服南郭に受く。業既に成り、門を開きて徒に授く。未だ幾ばくならざるに南郭の諸子死して、唯季女有るのみ。仲英贅（いりむこ）に就く。是に於て服氏を冒す。最も詩に長ず。著に踏海集有り。

四　書誌事項

使用底本　故長澤規矩也先生蔵本　四編四〇巻大二四冊　但し、長澤本は第二四冊（第四編第六冊）末の補遺・墓誌

銘を欠くので他本をもって補った。

初編　十巻六冊　奥附は、享保十二丁未秋九月日　江都書肆嵩山房　須原新兵衛梓行

二編　十巻六冊　奥附は、元文二丁巳秋九月日　江都書肆嵩山房　須原新兵衛梓行

三編　十巻六冊　奥附は、延享二乙丑冬霜月日　江都書肆嵩山房　小林新兵衛梓行

四編　十巻六冊　奥附は、宝暦八戊寅夏六月日　江都書肆嵩山房　小林新兵衛梓行

巻頭・題簽とも「南郭先生文集」とあり、見返はない。また、第二―四編末に書林嵩山房の広告が各一丁ある。他の諸本がこの広告を欠くことや表紙の紙質が同一であることからみて長澤本は後印本と推定されるが、印刷・保存状態が良いので底本に採用した。53％縮小。

諸本

一、国会図書館本

二、国会図書館鶚軒文庫本

三、内閣文庫本

四、静嘉堂文庫本

五、無窮会図書館織田文庫本

六、筑波大学図書館本

七、国学院大学図書館本　初編巻一―三（三冊）欠。

右七本とも同一本。但し、筑波大学図書館本第二編末に長澤本と同じ広告がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金華稿刪

きんくわこうさん　六巻四冊　題簽は別に「金華文集」（内閣文庫本はその例）、「金華文集刪」（静嘉堂文庫本はその例）、「金華先生文集刪」（無窮会本はその例）等種々あるが、巻頭は何れも「金華稿刪」となっている。著者は平野源右衛門、奥州三春の人、一名玄中、号金華。編輯者は水戸藩の支封守山藩の世子（諸侯の継嗣）金華の門人、源頼寛（松平氏）。享保十三年戊申（一七二八）序刊。校正者は田元秀俊卿（未詳）。所収の作品は詩二百九首、文二十三篇、書牘十四通。詩文の数が少ないのは、六度火災に罹り、十度居を移した為であると伝えられている（源頼寛撰、金華稿刪後序）。

一　内容の構成とその特色

巻之一には楽府と古詩を収めている。擬古楽府十一首、五言古詩十六首、七言古詩十三首。

巻之二には律詩を収めている。五言律詩五十首、五言排律三首、七言律詩五十一首。

巻之三には絶句を収めている。五言絶句十五首、七言絶句五十首。

巻之四には文章を収めている。序十八篇。

巻之五には書牘を収めている。書牘十四通。

巻之六には文章を収めている。記二篇、論一篇、墓碣二篇。

二　編纂の目的意図

金華の門人である守山藩の世子源頼寛（前述）が、金華の詩文集を公刊しようと意図して、金華に謀ったところ謝

絶された。しかし固く請うて許されたという事が、神門越正珪（越智雲夢の名、字は君端、越正珪と修す。）撰の「金華稿刪序」に見えている。

三　著者・編輯者

1　著者　平野金華

金華の伝記は、先哲叢談巻七、熙朝詩薈巻四十一、事実文編三十五に見えているが、最も詳細なのは事実文編第二所収の服元喬（服部南郭）撰の「文荘先生墓碣」であるから、これを書下し文に改めて示す。

先生姓は平、諱は玄仲、字は子和、奥の人なり。因って金華と號す。早くして孤となる。既にして冠するや、族人謀りて醫を東都に學ば令むること數年なりしも、其の志す所に非ず。更めて儒爲らしむ。初め徂徠物先生に從って修辞を問ふ。物先生も亦一隅を視すのみ。未だ幾ばくならずして、其の爲ぶ所を出すに、未だ嘗て聞かざる所も、諸を懐に探るが如し。是の時物先生方に英才を誘進す。乃ち大いに之を奇とし、顧みて喬等に謂ひて曰く、未だ嘗て進取斯の如き人を見ず、古の狂簡なる哉、吾裁する所無しと。乃ち日夜益〻憤勵す。著す所は必ず己に機軸し、遂に大著作と稱せらると云ふ。人と爲り磊落、倜儻瑰瑋之事を好む。故に其の結撰するや、毎に人を驚かさんと欲す。又滑稽多端、一世を敖弄す。故を以て或は見て狂にして奇を好むと謂ふ。然れども性善を喜び惡を疾み、人の善を視るは、啻に己自りするのみならず、將に諸を膝に加へて置かざらんとするが若し。酒を飲みて慷慨すれば、時に或は激烈にして泣下るに至る。一たび惡聲其の善き所に及ぶこと有れば、臂を搤りて之を反さんと欲すること、己私よりも甚だし。後には乃ち稍々節を折る。然れども其の義氣心本に著るる時は、感慨に發す。似て非なる者君子を蠹害すれば、乃ち曰く、彼何人ぞ斯れ爾るや。居るとも徒幾何せん、嘻笑する耳と。然れども亦微かに其を絶つを示すときは、文を作りて恆に稱すらく、獨り斗量を見ずや、人を容れざるに非ず、而して之を出すは二參にす。我は卽ち一斗も亦用

ひ、一石も亦用ひ、其の他を知らずと。卒後に其の家を探すに、素貧にて一書も藏せず、抄す所數卷のみ。人始めて其の才量に服す。後に守山侯の儒臣と爲る。年四十五にて卒す。享保十七年七月廿三日なり。東都の城北蓮光寺に葬る。配は神田氏、三男二女を生む。長は元幹字は國禮なり。女は甫めて十二、餘は皆未だ亂せずして沒す。

先生貧しきこと甚だし。而るに其の善くする所の者至れば、擊鮮して驩を極め、未だ嘗て窶しきを以て辞するを爲さず。毎に急有りて去るを得ざら令むるに至る。其の人を愛することも亦天性に出づ。卒するに及び、知るものと知らざるものと皆流涕す。既に客死して親無ければ則ち姻家・諸友、義を秉りて葬を營み、遂に石を立つ。守山の世子學を好み、先生を師とし重んず。是より先、其の稿を刪りて世に行はしむ。是に於て、世子卽ち文莊先生と謚し、喬に命じて銘を作らしむ。喬已に友爲ること二十餘年なり。先生は率ね人を可しとせず。而るに喬を推して一日の長に居らしむ。亦其の義氣の許す所乃ち爾り。皆眞の兄弟の如しと謂ひ、素服して爭ひて弔するに至る。遂に敢て辞せず。銘を作りて曰く、

天其の文を假して齒を假さず
千載懍々として神死せず
神死せず安くにか其れ埋めん
先生の墓を此の里に觀る

2　編輯者　守山世子源頼寛子猛

守山は藩名、小藩ながら水戸藩の支封。世子は諸侯の後継者の意、源は姓、頼寛は名、松平頼寛である。子猛は字。伝記は熙朝詩薈（詞華集日本漢詩4）巻一にもあるが、簡潔に過ぎる。詳細な伝記としては戸崎允明撰の「守山頃公世家」があり、事実文編第二に収められ、三百九十八頁より四百六頁にわたっている。以下三十行だけを書下して示

す。

守山公・頃公賴寛は、神祖の玄孫、恭公の第二子なり。異母兄を賴尙と曰ひ、母弟を讃岐侯賴恭と曰ひ、次は白河侯定賢、次は長沼侯賴濟、生む所の姫は松本氏と曰ひ、欽定夫人養ひて子と爲す。實に元祿十六年癸未二月七日を以て、江都小石川の吹上の邸に生る。字を子猛と曰ひ、之を寛にして以て猛を濟し、猛にして以て寛を濟すに取る。生れしとき黃龍之瑞有り。號して黃龍と曰ふ。幼くして成人の器有り、克く賢に下る。莊公鍾愛し、勢ひ適と耦ぶ。公は唯謹しむ耳にして、講藝の間敢て專らにせず。正德四年甲午、世子賴尙始擐甲の禮を行ふ。公年甫めて十二俱なはる。愛姫橋本氏病有りて、松本氏寵せらる。公愈〻謹しむ。傅母の藤田癘を患ひて出でんと請ふ。公聽きいれず。有司曰く、惡疾にて高貴に近づく可からずと。已むを得ずして之を聽きいる。革まるに及び、夜其の家に微行し、手を把りて泣く。何ばくも亡くして死せり。哀しみを致すこと甚だし。享保三年戊戌十一月冠す。莊公宗近の造刀を與へて曰く、神祖之分なり。先公我に屬し、戒めて曰く、汚穢に觸るること或らば、其の人必ず傷損せんと。故に婦人每に相戒む。我壯なるや愼むこと無く、猶も人に試みる。縷を濡らして拂ふに、寔に神物なり。我之を汝に誨ふ。世々の子孫戒めて疑ふ勿かれと。公受けて退き、室上に自書し、永く以て鑒と爲す。九年甲辰世子病有りて乃ち廢せらる。四月十一日、世子と爲る。年二十二、始めて德廟に朝見す。十二月十八日、從四位下に叙せられ、若狹守に任ぜらる。此の時に當りて、物子首めて古學を東海に唱へ、一代の左祖と爲る。諸子相與に劘切し、其の陶冶に勃興す。海內尸祝すること、蟻の腥を慕ふが如し。公雅に學を嗜み、物子を延かんと欲するも由無し。遂に平玄中を邀ふ。玄中は高足爲り。服元喬・縣孝孺名を齊しくす。田宜汎傅と爲る。亦其の徒なり。挾みて翼く。學成れば則ち物子耄いたり。痾を養ひて出でず。公就いて之を顧みること能はずと雖も、尺寸を其の業に効さんと思欲すること、俵俵焉として已まず。物子又常に公の己に篤志あるを稱へ、塾中の詩を能くする者を簡び、護園錄稿を撰著せしめ、乃ち公に請ひて焉に加はらしむ。物子世を捐つるも、業を執ること衰へず、物子の爲に一面の旗鼓を張らんと欲す。何ばくも亡く玄

中卒す。元喬と謀りて曰く、玄中の藩に在るや、我函丈之禮を執ること年有り。請ふ爲に私謚を作らん。之を一石に勒し、佳城中に負贔するに非ずんば、則ち百世の後、何ぞ人となり斯文に力むる有りと論ぜんや。鄙意此の若し。更めて之を商らかにす。謚して文莊と曰ひ、柔いで元喬を延きて師友と爲す。

付記　「金華稿刪」に対する評価

一、編輯者の松平頼寛曰く、

子和の文辭に於ける、結撰は思を窮め、氣と神と遇ふ。筆を援てば輒ち成り、復びは稿を置かず。（金華稿刪序）

二、越智正珪曰く、

子和の錄する所、文は則ち先秦漢魏而して騷を兼ね、輓近の澆漓之習を除く。其の詩に於けるや、上は則ち漢魏六朝、下は則ち開天の諸名家なり。其の成るや、煥乎として其れ文章有るかな。（同右）

四　書誌事項

使用底本　内閣文庫本　六巻大四冊　享保十三年序刊　表紙は書き題簽で「金華文集」、巻頭は「金華稿刪」。奥附は四周双辺で、「平埜源右衛門著／東都　書舗錦山堂／通石町二丁目／植村藤三郎梓行」とあり、続いて晏子春秋などの広告があるが、刊年表示はない。53％縮小。

諸本

一、静嘉堂文庫・無窮会図書館本　大四冊　題簽は「金華先生文集刪」(第一冊)。内閣文庫本と同一本。

二、国会図書館本　合大一冊　書き題簽。奥附は四周双辺、寸法は内閣文庫本とほぼ同じであるが、著者の次に、「享保十六辛亥年正月日」続いて版元が「浪華　書舗文金堂／心斎橋筋南久宝寺町南江入東側／河内屋太助」と変っている。次の鶚軒文庫本(A)の後印本と推定される。以下鶚軒文庫本は刷りの古いと思われる順に列記する。

三、国会図書館鶚軒文庫本(A)　大四冊　665―4　題簽は「金華先生文集刪」(第二冊)。奥附は左右双辺で、著者の次に「享保十六辛亥年正月日」とあり、版元名は内閣文庫本と同じ「錦山堂　植村藤三郎」。

四、国会図書館鶚軒文庫本(B)　半合?二冊　663―2甲　題簽は他本とほぼ同じ、奥附は内閣文庫本と同じ。

五、国会図書館鶚軒文庫本(C)　大四冊　663―4乙　題簽は(A)に同じ。奥附は内閣文庫本・(B)に同じ。

六、国会図書館鶚軒文庫本(D)　半三冊　664―3　題簽は「詩序金杶先生集　天(地・人)」とあり、見返に「詩序」と角書き陰刻し「金華先生文集」「大坂書肆　柔林堂蔵梓」とある。奥附に刊年はなく、広告末に「柔林堂中野啓蔵版」と表示されている。(A)の明治版か。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com